

大きな栗の木の陰で

<今月の聖句> 「主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いてください」
(詩篇5：4)

誰しも覚えがあるだろう。子どもの頃、まるで無限のごとく大きく
広く感じていた園庭だったが、大人になって久しぶりに訪ねてみると
「あれ、こんなに小さかったっけ？」と驚いた、などという話。
子どもにはおそらく、大人と違う、「悠久の時間」が流れているのだ。
つくし保育園を毎日、縦横無尽に駆け巡っている子どもたちもきっと
大人の想像が及びもつかぬほど、園の時間空間を大宇宙のように感じ
豊かな自然の不思議や美しさを、無限の心で受け止めているに違いない。

先日、「残ったプラムを刈り取ってくれませんか」と頼まれて
恥ずかしながら初めて、その木があることを意識した。それもそのはず
大きな栗の木の陰で、ひっそりひょろりと伸びる梢に茂る葉をかきわけて
ようやく、深紅に光る実の存在をつきとめられたほど。その茂みをめがけ
脚立のてっぺんから背伸びして高枝ハサミを3段伸ばし、ようやく届いた。
まずは鳥たちに「ごはん、ごめんね」とわびてから、全力で、ちょきん！
ころん、ころん、ぼとん。勢いよく地面に転がるその実を眺めて思った
大人の狭い視野をよそに、悠然と命を営み続ける自然がここにもあったと。

アラスカの大自然に人生を捧げた写真家、星野道夫さん（1952～1996）
にこんなエピソードがある。友人の編集者が日本からやってきた。ある日の
夕暮れ、海から一頭のザトウクジラが突如宙を飛んだ。帰り際、彼はつぶや
いた。「私が日本で忙しい時間を過ごしているその時にも、アラスカの海では
クジラが舞い上がっているかもしれない。そのことを知れただけでも来てよ
かった」。
のちに星野さんが振り返っている。「僕たちが日々の暮らしに追われている
その時も、悠久の自然とも言えるもうひとつ別の時間が確かに流れている。
それを知ることができたなら、いや想像でも心の片隅に意識できたら、
生きていく上でひとつの力になるだろう」

私たちも子育てや仕事で急き立てられると思う時がある。が、そんなとき、
少し立ち止まり、思い悩む自分を超えて、確かに流れている「悠久の時間」
にしばし心を寄せられたなら…。
今日も夢中で園の宇宙を駆けめぐっている子どもたちを羨ましく見つめな
がら、そう感じた。

(つくし保育園園長 つだかずお)